

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	4360290003
法人名	有限会社 あい
事業所名	認知症対応型共同生活介護 グループホームあい
所在地	熊本県八代市島田町863-3
自己評価作成日	令和2年1月20日
評価結果市町村受理日	令和2年7月29日

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kai gokensaku.jp/43/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	特定非営利活動法人 あすなる福祉サービス評価機構
所在地	熊本市中央区南熊本三丁目13-12-205
訪問調査日	令和2年6月22日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

これまで出会うことのなかった方々と、であい、人生に向き合い、それぞれの自宅ではないけど、ここ(あい)で自宅で過ごしているように、ゆっくり自分の出来る事をみつけ、その方の”我のままの暮らし”の実現を、日々考え追いつけています。希望に応じて看取りを行っています。最期利用者さんが目を閉じられる瞬間まで、ご本人、ご家族の思いを添い遂げられるように、日々のケアを努力しております。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

敷地内に有料施設を併設するホームは、開設から10数年という歴史を重ね、地域に密着し、小規模だからできる入居者との1対1のほのぼのとした時間を支えている。理念の中に「我のままに暮らす」を掲げており、職員は「入居者が何をしてもらいたいのか」「どう暮らしたいのか」など、普段の何気ない言動や言葉のやり取りから情報を収集している。本来入居者への呼称は、苗字にさん付けで対応することが尊厳へ配慮した言い方との認識があるが、中にはあえて「お父さん」「お母さん」などと声掛けし、その方に一番響く呼び方で対応することで、安心感や言葉の引き出しに生かされ、入居者の尊重について表面的なことに固執しない姿勢が表れている。何事も本人や家族の意見を尊重し、日中の布パンツへの移行や、寝具、衣類の選択や入れ替えについても家族に居室を見てもらいながら、協力を仰ぐことで信頼関係が深まっている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 ↓該当するものに○印	項目	取り組みの成果 ↓該当する項目に○印
56 職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○ 1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63 職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○ 1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57 利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○ 1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64 通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○ 1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58 利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65 運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○ 1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59 利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66 職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○ 1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60 利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67 職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61 利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68 職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○ 1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62 利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○ 1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない		

自己評価および外部評価結果

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	開設当初、入居されていた利用者の方の直筆を玄関入り口に掲示している。また年一回の会社の全体会議で代表、役員と(各管理者含む)スタッフ全員で理念の振り替えりを行っている。合同勉強会でも理念についてのワーク学習を実施している。	開設時からの理念には、知らなかった者同士の新たな出会いから、共に生活する中で互いにふれあい、支えあい、慈しみあいながら暮らすことを掲げている。その中に個別支援に焦点をあて、「我のままに暮らせる」場としてのホームの在り方を日々の支援の中で実践している。法人の合同研修で代表者は、理念を通じ「大事にして欲しいもの」を職員と共有し、アンケートを実施することでさらに掘り下げ、自己評価の機会となっている。	今年度は新型コロナウイルス感染症などもあり、代表者による理念の共有の機会が持たれておらず、新たな機会には是非実現されることを期待したい。
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	運営推進会議を通し利用者一人一人のお顔が見える様に工夫している。また一人での外出等が可能な利用者の方には、地域の方々に顔なじみになってもらえるよう、運営推進会議へ参加している。最高高齢者99歳を筆頭に平均年齢90.7歳という高齢化と重度化の中にあり、車いす利用者が大半を占めているが、自分たちが出来る事を行っている。	運営推進会議をリビングで開催することで、入居者自身にも地域や人とのつながりを感じてもらおうよう配慮している。新幹線の駅が地域の新たなシンボルとなったことで、数年前から宅地化が進み、住宅の増加に付随して、車両の通行量も増し、以前のようなのんびりとした散歩は難しくなっている。新たな取組として週1回(毎週木曜日)、移動販売車“あきないさん”を導入し、運営推進会議を通じて地域へも利用を呼び掛けるなど交流のきっかけとしている。	高校生や看護学生の実習の受け入れが実現しているが、予定していた中学生の福祉体験が中止となったり、コロナによる外出自粛を余儀なくされており、年間を通し地域との交流の機会は少なかつたようである。職員は今後を見極めながら入居者が地域の人々と触れ合う機会を作っていきたいとしている。
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	運営推進会議では、認知症研修に参加した報告。地域とは、情報の共有の場としている。高校生や看護学生の実習を受け入れており、今年度は中学生の職場体験の受け入れを予定している。またRUN伴八代や地域密着型有志の会での活動をしており、地域や八代市民の方々への認知症啓発、地域貢献に努めている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議は利用者さん、ご家族様、町内会長、副会長、民生委員、地域住民の方や市役所、地域包括センターの方々と二カ月に一回実施し、ホームでの出来事や勉強会での学びや人事。市からや包括支援センターからの情報なども盛り込んでいる。	運営推進会議に参加する包括職員や地域の代表者が、リビングで寛ぐ入居者の普段の様子を目にすることで、現状把握につながり、話の内容により具体性が増している。研修に力を入れており、八代郡市のブロック会や、同業者による研修会、避難訓練実施後の報告を行ない、意見や助言を受けている。会議は行政や包括と地域をつなぐパイプ役として双方の橋渡しをしなが、話を投げかけ意見の拡充を図っている。	今後はホームの日常的な取組から、食事や排泄、入浴といった身近な支援の現状を伝える事で、理解を深めるとともに、意見の引き出しにもつながると思われる。検討願いたい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	運営推進会議には市役所・地域包括支援センターの方には参加してもらっている。また市や包括支援センターの方から地域住民の方へわかりやすく情報を伝えられる機会を持っている。	運営推進会議で行政や包括センターに情報を発信し、ホームの現状を伝えながら透明性のある運営を継続している。包括主催の研修に参加し、他事業所との連携を図り、質問や疑問点があれば、その都度担当者の支持を仰いでいる。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者および全ての職員が「介護指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	社内外の研修に参加。施錠に関しては、防犯上の観点から夜間には施錠を行っているが、スタッフが2名以上になると開放している。また繰り返し、自分は…自分なら…など自分に置き換えることを日々ケアに生かしている。	「我のままに暮らせる」を理念に掲げ、入居者の言動ひとつにも意味があるものとして、付き添いのケアにより、行動を制限しない支援に取り組んでいる。同業者で作る研修会や、法人の合同研修で身体拘束や虐待について認識を新たにしている機会を持っている。ホームでは前面道路の交通量の増加や、様々な社会情勢を考慮し、職員が2名になった時点で、玄関の施錠を行うようにしており、家族への説明が行われている。	
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないよう注意を払い、防止に努めている	虐待とはどのような事なのか。を学ぶ社内外の研修があり、くり返し学ぶ機会を設けている。利用者の小さな変化や皮膚状態を共有している。不定期ではあるがスタッフと話す機会を設けている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	社内外で年間何度も学習出来るようにくり返し学べる機会を設けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	入居相談、入居時等説明を行っている。状況に応じて何かあれば個別に対応している。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日々の面会時やプラン説明時など利用者や家族の思いを共有している。また運営推進会議等では、意見が言いやすい様に心掛けている。	運営推進会議には毎回、家族が参加しており、ホームの現状を共有している。普段の面会やプラン説明時には入居者の日頃の様子を伝えながら、意見や要望を引き出している。プランの変更事項について、日中の布パンツへの移行や、食形態の変更等詳しい説明を行いながら、要望などを確認している。	コロナ対策により、家族などの面会制限をせざるを得ない状況の中、入居者の写真等を添えた文章を出して安心してもらべきであったとの反省の声があがっており、今後の教訓とされることが期待される。
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	スタッフから連絡がしやすい様にしており、状況に応じて個人面談を行っている。年度初めには代表や役員を含めた全体会議を行っている。	年度初めには法人の全体会議で職員が顔を合わせ、心を一つにしなが、新たな気持ちで新年度を迎えている。管理者は自らも夜勤業務に入り夜間帯の入居者の状況を職員と共有し、夜間明けには必ず労いの言葉をかける様に心掛けている。必要によって個別相談を行い、普段から意見や要望を聞き取り、希望休などに応じている。ホームでは職員の勤務年数に応じ、表彰の場を設けており、働きやすい職場環境を整えている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	社内外への研修へ参加を促し、個々に応じたスキルアップも推奨している。勤務休み希望や個々の働き方を考慮している。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	社内外の年間研修計画があり、スタッフの個々の状況に応じた研修へ学ぶ機会を作っている。経験が浅いスタッフに関しては、スタッフ内で教育と共にフォロー体制が出来ている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	イベントを開催し他事業所のスタッフとの交流ができるようにしている。八代市ブロック会の会議や勉強会には必ず参加している。他事業所の消防訓練や運営推進会議への参加を行ったり、数か所の事業所で専門性を高めた勉強会を行っている。		
Ⅱ. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	声掛け等には配慮し本人の不安感や緊張感が軽減できるようにゆっくりと、時間をかけ安心していただける様に心掛けている。また少しの変化や気づき等、専用シートに記入し状態把握に努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の不安や悩み、要望を聞く時間をとり、ご家族の協力を頂きながら、ご本人、ご家族が安心出来る様にスタッフ含め、お互いが協力し、暮らして行けるような関係作りを心掛けている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	まずは本人とご家族の困りごとに耳を傾け、プランにつなげ支援している。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	スタッフは、家族の代わりにはなれませんが、担当利用者のご家族の思いや、ご本人の思いなどを受け止め、支援しています。しかし重度化になり、難しい状況になってきています。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	家族にしか出来ない事は、ご家族の御協力を願いながら実施し、衣替えや面会時など極力家族の方が気兼ねなく面会に来れるような働きかけを行っている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	ご家族の御協力を願いながら、大切な人、場所など出来る事を継続をお願いしている。	入居者が日頃使用するコップや茶わん、スプーンなどの食器類は使い慣れた物とし、程よい大きさや使い勝手の良いものを選択している。馴染みの味は保存食(ラッキョ・梅干し)として日々の食卓にのぼり、入居者は出来ることで食に関わり、皆でテーブルを囲む食事風景が日課となっている。理・美容支援については、家族のもとでカットしたり、行きつけ店への外出や訪問による支援など個別の希望に応じている。車いす利用者が多くなった現在、外泊は少なくなったものの、法要や誕生日の外出、受診の付き添いや買物、祭りの見学などに家族の協力が得られている。	
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	車いすや移動動作が必要とする方が増えてきたが、座る場所、食事をする席の工夫している。一人を好まれる方もいる為状況に合わせて見極めている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	本人、ご家族とのつながりを大切にしている。今でも足を運んで頂き近況をお話頂くご家族がいます。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	お話が出来る方は、極力自分の考え、思いを引き出しどのように暮らしたいのかを確認する。重度化された方は、ご家族の意向を含め、本人の思いに添える様に務めている。	職員の担当制を敷いており、入居者との日常の関わりの中にしたいことや行きたい所、食への要望や不安なことなどを会話に盛り込み、入居者本人が発せられた言葉や、行動を大切に支援につないでいる。入居者の中には、自身の思いを言葉にできる方もおられるが、表現困難な方には、ホームでの生活の様子から推察したり、家族などの意見をもとに本人・本位となるよう取り組んでいる。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居前の生活状況や生活歴、家族に聞き取りし把握している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	専用シートを用い、日々のケアの中で気づきや実施できた事を記録している。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	状況に応じ変更追加がある。また担当スタッフによる評価また話し合いをしている。	ケアマネジャーは入居者・家族の意向を優先し、担当職員などからの声を総合的に判断して、プランを立案している。新たな入居者については、これまでの基本情報を尊重しながら、1日24時間、1週間を通じて入居者の様子を細かく記録し、ホームでのその方の生活の目安とするなど、新たなスタートにあたり、簡単な台所仕事などから徐々に溶け込んでもらうように工夫している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	スタッフは、本人の言葉をそのまま記し、本人が感じた背景や思いなどを含め、考察し記入し		
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	利用者に応じて、ニーズに応じて対応している。往診や訪問看護やカカのツト利用している		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	法事や墓参りなど家族の協力を得て外出されたりしている。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	かかりつけ医との連携は密にしている。利用者の状況に応じて往診対応もして頂いている。(4週間や2週間に一回)	それぞれのかかりつけ医を継続して支援しており、家族対応による受診を依頼し、結果を共有している。身体状況に応じ、往診への変更も検討している。職員は食事や排泄、表情など気になる点があれば、家族へ相談しながら早めの受診につなげている。水分補給を心がけ、緑茶や玄米茶、経口保水液などが提供されている。口腔ケアについては、歯ブラシを含め必要なケア用品を準備し、介助や見守り支援が行われている。	現在、新型コロナウイルス感染症の終息が見えない現状であるが、今後はこの感染症への対応についてもマニュアルの整備が期待される。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	利用者の状態の変化に気づき、看護して報告相談。医療機関やかかりつけ医への相談・受診へ繋げている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時には、本人が不安にならない様に、可能な限り面会へ行き、入院時の状況の情報収集をしている。また医療機関との連携を密にしている。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	終末のことにに関しては、入居当初は基より、体調の変化に応じご本人、ご家族と機会を作りそれぞれの思いに沿ったケアが出来る様に支援している。また運営推進会議の中でも利用者の方の体調なども知らせている。	重度化・終末期支援については、入居時に契約書の中で説明を行っている。入居時点では家族の気持ちも定まっておらず、必要に応じて話し合いの機会を持っている。また「目をつぶられる時は、医療機関か？ホームの自室か？」など、状況がわかるような説明を心掛け、相談に応じている。直近では最終の場として、本人・家族が「あい」での支援を望み入居され、医師や職員がチームワークで取り組み、ギリギリまでの対応の後、医療機関への救急搬送となった方がおられる。	施設長や管理者は、「今、この時を大切にしたい支援の重要性について指導を行っている。「であい、ふれあい、慈しみあい」の理念が、変わらず生かされていくことを期待したい。
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	スタッフは定期的に緊急時の対応の研修を受けている。また緊急時24時間いつでも相談できるようにオンコール体制をとっている。		
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	避難訓練を年2回、日中と夜間を想定している。また地域住民の協力を得られる様に運営推進会議内で意見を頂いている。防災備蓄も少しずつ準備している。	昼・夜を想定した年2回の避難訓練や、地域の同業者との訓練に管理者が参加し、意見交換するなど連携に努めている。また、運営推進会議でも意見やアドバイスを受け有事に備えている。消防との災害訓練を実施した際、あらためて備蓄の大切さを職員と共有し、味噌と米は常時確保しているが、他の防災準備も少しずつ進めている。	食備蓄は法人管理する近隣の建物で確保されており、今後は備蓄を活かした訓練についても実施したいとしている。また、ガスボンベを使った発電機などについても準備したいとしており、今後の取組が期待される。昨今の自然災害は想定を上回るものであり、火災とともに、あらゆる災害について入居者・職員の安全確保につながる対応を検討されることが必要と思われる。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	重度化しているが、利用者の立場に立ち自分に置かえてケアを心掛けている。	「自分たちの都合にならない介護」を日々共有しながら、一人ひとりを尊重したケアの実践に取り組んでいる。呼称は苗字に限定せず、シーンに合わせて下の名や安心される呼び方で対応している。食事をこぼしがちな方にも、タオルや家庭で使用するエプロンを身に着けてもらう等、工夫している。訪問カットを利用する際は、その方らしさが出るよう、本人や家族の希望を施術者に伝えている。入居後も本人や家族の希望があれば、衣類やアクセサリなど以前のおしゃれを継続できるようにしている。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	自己決定が出来る様に、生活の中で意識してかかわっている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	出来る限り本人の思いの実現に努力している。その中で本人の生活パターンや体調に気掛け対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	自分で選ぶことが出来る方には、時間を掛けてでも選んでいる。また自分でできない方には、気候や体調に合わせて、スタッフが本人の好む衣服の選択をし、色や柄等本人に伝えるように伝える様に支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員が一緒に準備や食事、片付けをしている	食事は、地元の野菜屋より新鮮な野菜や旬の野菜を配達。魚屋に骨を抜いてもらい食べやすく調理しやすいものになっている。肉も咀嚼力の低下した方にも食べやすい肉の選定をしている。スタッフも本人に合わせて形やお皿の工夫、食べやすいスプーンや橋の選択を行っている。ミキサーの利用者さんと同じメニュー食材を一品一品準備している。	担当者を中心に家庭的な献立を作成しており、こだわりの卵が配達された翌朝は、卵かけご飯が提供されている。食材は旬の野菜や、骨抜きした鮮魚、スジの少ない精肉など専門店を利用している。行事食や正月は大福茶を準備するなど、食事は入居者の楽しみの一つとなっている。また、三食とおやつ（午前・午後）に加え、17時にはきな粉牛乳を提供しており、昼食の麦ごはんと共に自然排便につなげている。食事形態や食器も個々に応じて準備しており、職員は会話を楽しみながら必要な支援に努めている。	生鮮品をはじめ、地元の製茶店や生産者からの米の購入をはじめ、食材のこだわりについても家族などへ伝える事で、安心や面会時の会話につながるものと思われる。取組に期待したい。

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事量を見ながら、摂取量が少ないときには、本人の好む菓子や果物を準備し補ったり、食べやすい食材の工夫や検討している。栄養が確保できない様であれば、高カロリーの捕食している。		
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後口腔ケアの実施を行っている。義歯の状態や残歯の状態を確認している。うがいが出来ない利用者に関しては、様々な口腔ブラシを用い丁寧に実施している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	自分で利用できる方には、失敗しても交換出来る様にトイレ内のボックスに準備している。また本人の排泄のサインを見逃さないようにしている。	排泄のサインも個々に応じて異なることから、職員は状況を共有しながら支援している。日中は布パンツの着用にも努め、パット・尿器などの種類や必要の有無も常に検討を行い、現状に即した排泄支援に取り組んでいる。不快な心地は不安にもつながることから、失敗が生じた場合は、プライバシーに配慮しながら、速やかに対応している。ホームのトイレは、入居者と共有であり、職員は臭気や使い勝手など普段から確認ができています。	女性入居者が下着に書かれた名前を見て娘さんの文字である事を喜ばれる等、家族と共に、入居者の日常を支えている。
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	便秘解消に、牛乳に甜菜糖と黄な粉を入れ飲みやすい様にしている。コントロールが必要な方へは、水分摂取量の調整をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	入浴の予定は個々に応じて回数は決めているが、入りたくないときや体調が優れないときに等柔軟な対応をしている。	個々の希望や身体状況に応じ、週2～3回の入浴を支援しているが、発汗や汚染などによっては、シャワーも含め柔軟に対応している。特に失禁時は清拭や着替えにより、清潔保持に努め、不快なく過ごせるようにしている。浴室は前回の評価を受け棚の整頓を心掛け、ゆっくり寛げる環境に取り組んでいる。また、職員も水圧を確認するために、実際シャワー浴を体験してみる等、入居者目線での対応を心掛けている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	個々に応じた睡眠パターンを把握し、気持ちよく休んでもらうように配慮している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	内服内容を知り、副作用も知ることで、内服薬の重要さが理解。内服薬があった場合は情報を共有し、経過観察を記録に記載して共有している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	生活の中で、それぞれに応じた生活歴を考慮し実施しているが、無理維持はしない様にする。		
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	外出は、ご家族の御協力を頂きながら実施している。しかし出られない利用者もいる。ホームのウッドデッキを利用し気候や天気に応じて実施している。	外出支援はホームの取組だけでは限りがあり、家族の協力を得ながら実施している。受診や墓参、法要、ホーム近隣の駅へお孫さんの見送りに出かけるなど、家族とのひと時を楽しまれている。身体状況から外出が困難な入居者もおられ、デッキで馴染みの山を見ながらの日光浴などに努めている。数年前新駅ができた事により、交通量の増加や田畑の減少など環境も異なり、以前のように身近な散歩は安全に出来なくなっているようである。	あらたまった外出に限らず、身近な散歩やデッキでの日光浴などのについても、家族へ伝える事で安心や家族にできる外出支援への協力につながると思われる。コロナ感染症が終息した後は、以前のような外出や移動販売の利用など、個別支援への取組も検討しており、実現が期待される。
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	移動販売、乳酸菌レディの訪問がある。希望に応じて家族と相談している。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	要望があった時には、応じている。手紙を書く事が出来なくなっている。しかしご家族の面会が多く日常の変化などは本人を交えて伝えている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	リビングや廊下にはいつでも、腰掛けられる様配置している。縁側からは、皆さんが親しんでいる竜峰山が見える。	ホーム内には、敷地内に咲いたものや職員の庭先から持ち寄った季節の草花を、洗面所や通路などに飾ることで、より家庭的な環境になっている。民家改修のホームは、玄関や脱衣所をはじめ、広さの面では使いづらさもあるとしているが、職員は、施設感のない造りを活かしながら、入居者が居心地よく過ごせるよう、安全面を含めた環境に努めている。縁側のデッキは日光浴や寝具・洗濯物干し、台所用品など乾燥の場所としても活用され、入居者にとっては馴染みの光景となっている。	職員のメリハリのある会話や笑顔の対応も、何よりの居心地の良さにつながっていると思われる。変わらぬ支援に期待したい。
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	廊下、縁側、談話室、リビングと個々に応じた場所を選べるようになっている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かし、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室づくりは、ご家族と本人が主体にレイアウトして頂いている。また、ご家族の写真やお仏壇等を持参し自宅での暮らしのままである。	居室の環境は衣替えをはじめ、必要な物品の購入、レイアウトなど家族への協力を依頼している。入居当初持ち込まれた品も、異食や幻視・歩行面など身体状況から見直しも行われている。民家を改修したホームの居室は、採光や造りも異なっているが、ベッドから布団敷きへしたり、布団から低床ベッドに移行するなど状況に応じて変更している。また、新聞紙やちらしを使ったゴミ箱用の袋の準備、仏壇を落ち込まれた方のご仏飯など、個々に応じた環境を、職員の提案を生かしながら進めている。	花が好きだった方に花の形をしたソープの準備したり、大好きなおしゃれができるよう衣類やアクセサリーの持ち込みなど、家族の協力は居室での時間を安心して繋げている。今後も個々に応じた居室環境作りの継続に期待したい。
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	トイレの文字がわかられる方へ向けて、トイレの場所へ表示している。また夜間は洗面は場所がわかりやすくするため、点灯して対応している。		